

岡山県和牛研究会が誕生しました

皆さんの入会を歓迎いたします

岡山県和牛研究会設立の趣旨

近頃、農業の変貌のしかたには甚しいものがあります。その中であって、和牛も例外でないばかりか、ますます難問題をかかえ、早急に解決をせまられるものが多いことは言うまでもありません。一方、国民所得の増大は食生活を急速に変えつつあり、なかでも食肉の消費は、ここ5ヶ年間に2倍近い伸びをみているのであります。

ここにおいて、これら食肉に直接関係のある和牛について顧ると、過去一時は12万頭を容した和牛王国岡山県も、時代の波には抗すすべもなく、今では8万頭台にまで後退しております。これには、経営の問題なり、肉牛タイプへの和牛の改良増殖から流通にいたる技術的な問題が多々あると思えます。和牛の特質である粗飼料の利用性なり、省力管理による多頭化飼育技術ならびに方策を研究し、農業経営的にマッチし、自立経営に持って行けるような、農家の歓迎する和牛を作りたいものであります。

さて、我々和牛関係者が、なごやかで、気軽な気持ちでこれらの問題を研究し合い、誰でも入れるような和牛の集いをここで作りたいと思い、研究会の結成を計画した次第であります。

岡山県和牛研究会の概要

1、目的

岡山県の和牛に関する技術の練磨および知識の習得を図ると共に、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

2、名称

岡山県和牛研究会

3、事業

①和牛に関する経営、技術および流通に関する研修

ならびに講習、講話会の開催

②和牛に関する試験研究調査の成績に関する発表会の開催

③和牛に関する資料の交換および分譲

④実地研究のための視察

⑤和牛モデルファームの育成ならびに強化

⑥会員名簿および会報の発行

⑦その他会の目的達成に必要な事業

4、会員の資格

……会員を分けて、正会員および賛助会員とする。

①正会員は和牛に関する機関に在職するもの、およびその他本会の趣旨に賛同する者とする

②賛助会員は本会の趣旨に賛同する地方自治団体ならびにその他の団体、会社等とする。

5、加入

……入会しようとするものは、入会申込書に所定の事項を記入し、会費を添えて本会に申込みものとする。

6、役員

会長＝1名 副会長＝2名 評議員＝若干名

監事＝2名 幹事＝若干名

7、役員を選出

①会長、副会長は理事の互選とする

②理事および監事は総会で選出（地区ならびに事業所別等）する

③幹事は会長が委嘱する

8、会費

①正会員の会費は、年額200円とする

②賛助会員の会費は1口以上とし、1口年額は3,000円とする

あいさつ

岡山県和牛研究会の創立について

林 正 夫

さきに設立された岡山県和牛研究会の会長をお引受けすることになりました。もとより、この研究会のねらいとするところを的確に把握し、目的地に向かって正確な道程を走りとおせるかどうか、内心ひそかに心配しましたが、他の役員各位とよく相談しながら、効果的に会の運営に当ることが、会員の皆さんに伝えるゆえんであろうと思い、駄馬に鞭打って、ともかくお引受けすることに決心いたしました。誌上をお借りしてごあいさつを申し上げるとともに、今後この会の円滑な発展のため、皆さんの温かいご支援ご指導をお願い申し上げます。

はじめ、この会の設立を思い立ち、一部の方々と相談いたしましたのは、次のような考えに端を発したことでした。即ち、経済の内外情勢の変化は極めて著しいものがありますので、美しく画かれた農業の将来ビジョンに到達する道程は極めて峻険であると言わなければなりません。このような情勢の中での畜産は、現在花形と見られている酪農といわず養鶏と言わず、甚しい困難に喘いでいると言っても過言ではありません。ましてや常識的には低位生産性をうんぬんされる和牛にまつわる沈滞ムードは、残念ながら現実のものとして素直に受け取らなければならない面も多いと存じます。しかし、常識的に和牛を軽視する誤りを指摘し、進んで和牛のもつ利点を活用する方向に関係各方面の総力を結集しなければなりません。こうすることなしに順調に伸びる食肉の需給を、円滑にすることはできないと思っています。

いつも申し上げることで恐縮ですが、和牛は他の家畜がもっていない捨て難い利点を根強く持っています。まず、飼料事情の悪化につれて浮彫りにされるのは、草—自給粗飼料—で飼える和牛の強味です。これは乳牛にも通ずることで、飼料の問題が重大なとき、他の鶏や豚の及ばない強味です。ついで、未利用ないし低い利用率のままの広大な山林原野に眼

を移しますと、これらは他の作目では利用できなくとも、少し手を加えることにより、和牛ならば立派に生産基盤として活用できるのです。また、昨今ますます逼迫の度を加えてまいりました農家労働力の面から見ますれば、劣悪な労働力でも間に合う和牛飼育経営は労働生産性の高いことを認識しなければなりません。その他資金の投入の少なくてすむことも得難い強味の一つです。

これらのことを再認識して、子牛生産であれ肥育経営であれ、真に近代農業の一員として堂々と伍して行くようにすることは、あえて難事とは思えません。このために必要な技術なり経営なりについては、今までに蓄積されたものを、うまく組み立てれば、効果的に和牛の生産性を向上することができると思っています。このような要請に応えたく、主に技術的観点から、生産農家自体も、これを援助する立場の関係のあらゆる機関にある者も、すべてが一丸となって日常たゆみない研究努力を重ねようとして、その共通の場を和牛研究会に求めたわけであります。従って、会員の構成を見ていただきますと、正会員は肩書きをもたない個人であり、準会員はこの会の主旨に賛同する団体等となっているのであります。ここで、皆さんの中に当然問題視される点があろうと存じます。それは、もっと大所高所から物を見なければ、例え考えはよくとも目的達成はむずかしいので、政治的あるいは行政的な見地から、この会の運営を考えるべきとすることご意見だろうと存じます。

なるほど、子牛なり肉牛なりの和牛から得られる商品が農家の手を離れてから、消費流過程において、多くの問題を抱えていることは痛いほど思い知らされています。この流通パイプの通りをよくすることなしには、いかに農家の手のうちだけで工夫をこらしても、効果は知れていると言えましょう。しかし、消費流通対策は局部的に力んで見ても効果は期待うすで、広く国の規模で律しなければならない

岡山畜産便り 1965.04・05

と思います。そこで、これを手がつけられないとして、ただ放任するのではありませんが、これは政治行政に委ねて、手近に私達で手のつけられる問題—主として生産過程の一を取り上げ、差し当っての効果も挙げたいと念願している次第です。

たいへん長くなってしまいましたが、このような考えに立って、とりあえず年1回はこの会の研究会を定期的に行い、例えば和牛の試験研究成績の検

討会などをやり、また、数回は折を見て研究の機会をもち、この会を中味の充実したものとして、長く運営して行きたいと存じております。重ねて皆様のご鞭撻をお願いいたしましてごあいさつとします。

(昭和40年3月)

和牛の子牛生産と肥育の問題点

上坂章次(京都大学教授)

3月6日、県庁9階ホールで行われた講演会より

今後に対する前提

和牛の子牛生産地のこれからのあり方については、繁殖か肥育のみにするか、一貫経営にするか、種々論議されているが、およそ和牛の子牛生産地の未来像を論ずる場合には、その前提になる今後の見通しについて、はっきりさせておく必要がある。それではどのような前提を考えればよいか、私見を述べてみたい。

1、まず10年ぐらい先のことを考える

期間が短く構想が小さいかも知れないが、せいぜい10年ぐらい先までのことしか、考えられないと思う。

2、山村の現状をどこまでも重視すること

和牛の子牛生産地の農家は一般に山村で、しかも小農経営が大部分である。この状態がそう急に変ることは考えられないし、一般に、農家の就業人口は減少するが、農家戸数は簡単には減らないのが実情である。そして、これら和牛の子牛生産農家は山村にあり、他に所得を増やす途はなく、この農家をいかにするかが今日の問題であるが、これを解決しようとする際、この現状を土台にして考え、徐々にやらなければならない。

3、米作りは当分有利に続けられること

和牛の子牛生産地の農家でも、その面積は少ないかも知れないが、水田を持っている。そして、米作りは当分有利に続けられると考えられるから、できる

だけ永く作るべきであろう。

4、和牛の子牛生産には当分企業的なものはできないこと

前述したことを考え合せてみると、当分の間は、和牛生産では企業的経営はできそうにない。まず、第一段階として、和牛の飼育頭数を農家平均10頭ぐらいいにして、その上で第二段階として、1人で60~80頭飼うような企業的経営が現われてくるであろう。それまでは、まず米作りを五反ぐらいいにして、その上に和牛を10頭程度飼う経営に一般を引上げることである。そして一般の基盤整備ができて、なおその上に、ある程度農家戸数も減ってからでないか、企業的経営が現われることは難しいであろう。これに対して、肥育経営の方はすでに1人で50頭飼っているような、企業経営に近いものがある。肥育には生産環境がないといってもよいぐらいいで、子牛生産より企業経営がやり易いのであるが、現在の大部分の多頭肥育は米作に結びついているものである。しかし、いずれにしても、子牛生産の企業的経営は肥育より10年近くは遅れるであろう。

5、平坦地における和牛の多頭肥育はまだ当分伸び続けるであろうこと

近年、食肉の需要増を反映してか、肥育頭数が増えてきており、ことに去勢牛の若令肥育の伸びは著しい。年間20~30頭出荷の農家例も多く、また去勢牛の理想肥育的多頭肥育も、雌の短期多頭肥育もふえている。

これは、有利な米作りを行い、それと労力の競合

岡山畜産便り 1965.04・05

もせず、しかも老人にでもできる点を活かして伸びており、極端に省力して労働時間が1日1頭当り4～5分という例もある。この肥育はまだ当分伸びる傾向にあり、関東地方に著しく、我国で肥育を主目的としている農家の25%は関東にある。

6、協業経営は和牛生産地ではそう簡単に伸びそうでないこと

子牛の生産地に協業経営が伸びてゆくようになれば、生産地の経営のあり方も変わってこようが、現在の協業を見ると肥育においてもうまくいっておらず、拙いことではあるが、協業経営はむずかしいことである。

一応、以上のような前提と見通しのもとに子牛生産地のこれからのあり方を考えねばならない。

もっと行政的援助を

一環経営の有利な点は、子牛価格が下った時に調節ができることである。しかし、今日のように肥育が増え、しかも若令肥育が伸びている現状では、子牛価格が昭和30年に暴落したようなことはそう度々あるとは考えられず、今後の見通しいかんによることである。

しかし、現状では子牛生産と肥育との複合経営が一番うまくいっている。それは、生産基盤の不十分な状態で、つまり2～3頭の母牛しか飼えない基盤に10頭もの母牛をもって子牛生産をやっても、ろく

な子牛はできない。従って、現在は3頭を子牛生産用、4頭は肥育牛という合計7頭ぐらいが適しているようであるが、将来、これをこのままの形で拡大して95頭程度の経営にすることができるかどうか疑問である。

子牛生産のみでも実質はかなり複雑で、例えば、母牛が10頭おれば更新のための育成が年間2～3頭は必要であろうし、老廃牛、繁殖障害のため肥育にまわす牛もでてこようし、決して単純なものにはならない。また、仕事のほうも夏は一般作の作業、冬期飼料の準備、冬は分娩、育成、子牛の出荷前の飼直しなどあってかなり忙しい状態である。

これに比べて、肥育はあまり手間もかからないし、土地も必要なく、土地生産性、労働生産性も高い。ただ素牛の入手と肉牛の販売に面倒さはあるが、規模拡大し易い。従って、肥育のほうは行政的にほっておいても大丈夫であるが、子牛生産農家はそうはいかず、補助、助成の必要がある。和牛生産地の放牧場、草地造成は、国でやるか国と県の両方でやるかして農家に渡すべきで、農家では負担が重すぎる。

国の政策をみると、酪農には多いが和牛に対しては非常に貧弱で不調和である。うまい食肉が安く日本にこれから輸入できるとは考えられず、ここらで国も県も腰を入れて、子牛生産基盤に力を入れてほしいと思う。

食肉の国内生産と今後の見通し

(畜産の研究40・1)

食肉需給の現状

わが国の食肉消費量は昭和31年を契機として年々著しく増加し、37年には53万7千tを消費し、その需要額は年率17～18%の伸びを示している。その内訳を家畜別にみると、37年には豚肉が全体の60.3%、牛肉が29.2%で大部分を占めているが、豚肉の割合が増加してきている。また、その国内自給率は95%以上で、あとの3～4%を輸入にあおいでいる。

そして、昭和37年度における国民1人1日当りの消費量は、肉類合計で21.6g、牛、豚肉合計では10.8

gを消費している。

今後の見通し

農林省の公表した「長期計画」のなかで、食肉の昭和46年度の需要の見通しは、年間1人当りの消費量が9～11kg程度で、国内総需要量は114～145万t程度と見込んでいる。

これに対して生産量の見通しは102万t(牛肉18.9万t、豚肉59.2万t、鶏肉22.3万t、その他1.8万t)で、需要量に比べて生産量が12～43万t

岡山畜産便り 1965.04・05

(22万t) 不足することになり、このため家畜改良増殖法に基き公表された家畜改良増殖目標では、需要量が生産量に見合うように目標頭数が示されている。この家畜改良増殖目標による食肉の生産量は124万tで、長期計画に比べて少し多く、その内訳は牛肉29万t、豚肉61万t、鶏肉32万t、その他の家畜による食肉の生産量により構成されている。

長期計画による昭和46年度の家畜の飼養頭羽数は、肉牛222万頭、豚739万頭、鶏13000万羽であるが、家畜改良増殖目標では、肉牛250万頭、豚739万頭、鶏15000万羽で、肉牛を強力に増殖することになっている。即ち、昭和39年度の肉牛飼養頭数が221万頭であるから46年までに29万頭増殖しなければならない。

一見して豚の増殖の方が容易と思われるが、豚は濃厚飼料、輸入飼料に対する依存度が高く、豚の増殖により今以上の濃厚飼料需要の増大をさけるため、粗飼料に依存できる肉牛を増殖して、食肉の供給を図っていこうとする企図がみられる。